

舞台衣装と流行

佐々井 啓

1. はじめに

オスカー・ワイルドは、その著作のなかで、衣裳についての見解をしばしば述べています。今回は『仮面の心理』の中から、いくつかを紹介しましょう。

- ・この価値は二重で、絵画的 picturesque でかつ劇的 dramatic である。つまり前者は服装 dress の色彩に、後者はそのデザイン design と性格 character によるのである。
- ・衣裳はひとつの生長、ひとつの進化であり、各世紀の生活の作法、慣習および様式の極めて重要な、おそらく最も重要なしるしである。
- ・事実、どの時代でも社会状態はとてはっきり衣裳に現れているので
- ・衣裳 costumes は、もちろん、デザイナーにとっては衣裳だ。だがそれを着る者にとっては衣服 dresses であるべきだ。
- ・衣裳とは説明抜きで性格（人物）を表示し、劇的状況と劇的効果を生み出す手段ということである。
- ・ある時代の衣裳を理解するほどの人なら誰でもその時代の建築やその環境をも必然的に理解するのである。そしてある世紀の椅子からそれがクリノリンの世紀であったかどうかを見分けるのは易しい。

ここに挙げましたのは、衣裳がいかに関人物を表しているのか、ということ述べている部分です。さらに、舞台衣裳は、その役割が最も強く表れている、と言えるのではないのでしょうか。このような点を踏まえて、ワイルドの喜劇と衣裳との関係を当時の雑誌の記事から紹介します。

2. 喜劇の衣裳と風俗

(1) 『ウィンダムア卿夫人の扇』1892年2月20日初演

『ウィンダミア卿夫人の扇』については、ワイルドが「ピンクのランプシェードのある現代的な客間劇」を渡した、と述べています。アクター・マネージャーであるジョージ・アレクサンダーのセント・ジェームズ劇場で上演されました。

アレクサンダーの妻のフローレンスはこの劇の登場人物の衣裳の責任者であり、その時の様子を次のように述べています。

- ・セント・ジェームズ劇場での初日は、大きな出来事です。…私はガウンを場面の装飾に合うように注文しました、何も壊れたり、醜かったりしないようにと。
- ・舞台衣裳に関して、私は「最先端」でした。なぜなら、その頃の人々は、新しいガウンを注文する前に、セント・ジェームズの劇を見にくるからです。

ここでは、フローレンスが役柄に合うように衣裳を注文し、それが場面とよく合っているように注意していることがわかります。さらに舞台衣裳が観客から注目されていることが記されています。

それでは当時の写真とイラストによって、実際の衣裳を見ていきましょう。

1) 男性の衣裳

男性の昼の装いは、モーニング・コートにウェストコート、トラウザーズであり、夜の装いはイヴニング・コートと白いタイ、ウェストコートにボタンホールの飾り花です。これは、舞台写真の男性たちの装いです。いずれも同じようなスタイルですが、ボタンホールの飾り花はそれぞれ凝ったものであったようです。

2) 女性の衣裳

当時の女性雑誌である『クイーン *The Queen*』(1892年3月5日)には、女性の衣裳のイラストと解説が載っています。それらを紹介しましょう。

ウィンダミア卿夫人の衣裳は、ワトー風の長いクリーム色の絹のトレーンのあるシフォンとレースで作られた白いティーガウン、スカイブルーのサテンのガウン、柔らかいピンクの家庭着の上に茶色のヴェルヴェットで true lovers' knots (恋結び) の飾りがついているコートです。

アーリン夫人が登場したときのガウンは、金糸がおりこまれて、白地にバラの模様のあるブロケード、襟あきには柔らかい白い羽根 (オストリッチ)、大きなスズランの房、蘭とライラックの巨大なブーケであり、人々を圧倒します。また、大きな渦巻きの模様のある黒いサテンのク

ローク、グレーの羽根が端についたグレーのヴェルヴェットのルダンゴットなど、先端のデザインの衣裳が着られています。「心があるとふけて見える」「心はモダンなドレスにはぴったりしない」などの台詞が、これらの衣裳の豪華さを裏付けるものとなっています。

(2) 『なんでもない女』 1893年4月19日初演

『なんでもない女』についての劇評には、次のようなものがあります。

・『なんでもない女』に映し出される社交界は、輝かしい社交界である。それらは、考えかたや会話や衣裳において輝かしいのである。

ここでは衣裳についても評価されていることがわかります。

1) 男性の衣裳

イリングワース卿は、盛装の場面でドレスコートに白いウエストコート、白いタイにボタンホールの花をつけています。そして、ダンディであるための条件をジェラルドに言います。

「ところでジェラルド、ネクタイぐらいもう少しくまく結べるようにならなきゃいけないよ。ボタンホールにさす飾り花は、感覚がすべてであるが、ネクタイの基本はスタイルなのだ。ネクタイがうまく結べて初めて人生への第一歩を真剣に踏み出したことになる。」

ここではダンディにとってネクタイが重要なポイントであることが述べられています。

最後にアーバスノット夫人の家を訪ねた場面では、日常着であるチェックのスーツ、ウエストコート、黒いタイに帽子で描かれています。

ジェラルドは、イリングワース卿と同じく、盛装のドレスコートの姿がみられます。

2) 女性の衣裳

アロンビー夫人は「うわついたおしゃれな女 (social butterfly)」と評され、ペチコートを着たイリングワースとも言われています。

パーティーの場面では、薄いグリーンのエンパイヤ風のガウンで、小さなピンクのバラの格子模様とピンクのバラの花綱があり、黒いサテンの裏打ちがされています。広くてたっぷりした袖は白いシフォンで、大きなピンクの羽根の扇を持っています。

スタットフィールド卿夫人は「まじめでロマンティック」であり、ボディスは、ゼラニウムのピンクの色合いで花模様が織り出されたクレー

ブデシン、スカートと袖は明るいモクセイソウの緑ですが、「風変わりで、時代遅れである」と評されています。

ヘスターは「ピューリタンの若いアメリカ女性」であり、オパールのような白いモワレのガウン、パールとシルバーのスパングルのついたシフォンを上にかけた白いサテンのドレスなど、白いドレスが特徴となっていて、「白い象と同じくらい珍しい」と評されています。率直に意見を述べるヘスターを、ワイルドは新しい女性として描いています。また、黒い小さな玉が全体に散っているピンクのシルクに黒い裏のついたドレスも見られます。

アーバスノット夫人は「一人の地味で古風な女性」であり、黒いヴェルヴェットの長いプリンセスドレスと長いトレーンのある黒いアルパカのドレスで登場します。このドレスは「彼女の完全な姿とあらゆる動きにおける優雅さ」を表していて、気品と古典的な優雅さのある「1830年代風のガウン」であると評されています。このドレスはワイルドが「あの黒いヴェルヴェットのご婦人」という台詞で表現しており、衣裳が人物の特徴を表しているといえます。

(3) 理想の夫 1895年1月3日初演

『スケッチ *The Sketch*』には、「現在、もしあなたが気分を変えて、アイデアに満ちた著しく現代的なガウンを望んでいるのなら、新しいヘイマーケットでのドレスについて私に話させてほしい、なぜならそれらは確かに注目に値するからである。」と述べられ、舞台衣裳が人気となっていたことが窺えます。

1) 男性の衣裳

ゴーリング卿は「流行とは自分が身につけているもののことだよ。流行おくれとは他人が身につけているもののことさ。」と言い、もっともダンディな人物として描かれています。夜会では正式なイヴニング・コートに白いウェストコート、白いボウ・タイ、飾り花をつけ、その花は日に何度も取り替えられたのです。日中にはフロック・コートに黒いタイ、衿のあるウェストコート、トップ・ハットにステッキ、飾り花の姿です。チルターン卿も同様の装いであることが写真からわかります。

2) 女性の衣裳

チルターン卿夫人は「潔癖で道徳的、理想を追い求めるピューリタン

の女性」であり、また「進歩的な思想の持ち主」として描写されています。

その装いは、イヴニング・ドレスであり、白いサテンのガウン、ナポリのスマレの枝の模様のついたトレーンを曳いた、頭部にダイヤモンドのティアラをのせています。また、白いサテンの散歩服にはアコーディオンプリーツのあるピンクのシフォンが胴部を覆っています。

最後の美しいトレーンを引いたキンボウゲの黄色のサテンのドレスには黄色のサテンのショルダーケープがあり、青いカフスがついた鮮やかなものです。

一方、「女山師」であるチェヴリー夫人は、その登場の場面で、次のようなドレスを装っています。すなわち、暗いエメラルドグリーンでサテンで、ピンクのバラの小さな束があり、ツバメが空を舞うように付けられています。この装飾については、「野蛮で不快である」という批判もありました。

ト書きに「ラミアみたいに、夫人は緑と銀色の服を着ている。黒縹子の外套には、薔薇の枯れ葉色の絹の裏」とある場面では、薄いティー・ローズ・イエローのサテンで陰影のあるバラの模様のプロケードに赤いサテンの折り返しのあるカフスがついたドレスで、赤いサテンの裏のついた黒いサテンのクロークを重ねています。豪華であてやかな衣裳として注目されています。

メイベル・チルターンは「林檎の花のようなかぐわしくのびやかな」姿としてあらわされています。最初のドレスは、黄色のサテンでブレンなたっぷりしたスカート、左側には芸術的にアレンジされた白いライラック、藤色の蘭、濃い色のパンジーの花束がつくものです。

また、薄い黄褐色のクレープのガウン、スカートには小さな尖ったパネルに小さな金のボタンと黒いボタンホールがつき、上端には黒いサテンの蝶結びのリボンが特徴です。このドレスは他のすべての中で最もよいデザインであると評価されています。

(4) まじめが肝心 1895年2月14日初演

『まじめが肝心』の初日は吹雪でしたが、劇場は多くの馬車や人々の列で取り巻かれていたといわれています。この劇は、『ウィンダミア卿夫人の扇』と同じく、ジョージ・アレクサンダーのセント・ジェームズ劇場で上演されたものです。

1) 男性の衣裳

ジャックの昼の装いは、フロック・コート、黒いタイ、手袋ですが、喪服で登場する場面では、黒いステッキ、黒い縁取りのあるハンカチーフ、シルクの縁取りのない黒いフロック・コート、黒いヴェスト、ネクタイ、濃い色のトラウザーズ、黒いシルクハットに黒いバンドを巻く、という完全な姿となっています。この場面では「ジャック、庭の奥からゆっくりと登場。黒づくめの正式の喪服、黒い絹の喪章を帽子に巻き黒い手袋をはめている。」とあります。

この場面は、喪服によって一瞬でおかしみを理解することができ、衣裳の持つ重要性が十分に発揮されているといえるでしょう。

アルジャンロンは、最初の場面では、モーニング・コート、スカーフ状のタイ、衿付の薄色のウェストコートに飾り花です。セシリーを訪ねる場面では、チェックのスーツを着装しています。これはバンベリースーツであると考えられ、次のような台詞があります。

「礼服 (dress clothes)、喫煙服 (smoking jacket)、その他バンベリー用の服 (all the Bunbury suits) を全部入れといってくれ……」

ここでは、礼服のほかに、夕食後の喫煙室で着るスモーキング・ジャケットや、郊外で着るカントリー風のスーツをバンベリースーツと名付けていることがわかります。

2) 女性の衣裳

グエンドレンは、教養のある新しい女性としてあらわされています。まずはじめの衣裳は、薄い黄色と紫味を帯びた青のストライプのモワレの横縞のシルクで、ボディスは胸にヴェルヴェットのフリルとボックスプリーツがあります。上には黒いレースで覆われたケープを着、黒いストローハットを被っています。

次のドレスは白いシルクに淡い色のスマイレの花輪を織りだした布で、全体的にスマイレ色を基調としています。胸壁状にカットされたケープとストローハットを着けています。このデザインは、前年にパリで流行したもので、新しいデザインが積極的に取り入れられていたことがわかり

ブラックネル夫人は、ジャックの品定めをしている場面では、シンプルな形の金茶のヴェルヴェットで、ボディスには黒と金の飾り紐のトリミングのあるドレスに、同じ素材のケープを着けています。ボネットには黒いオストリッチとピンクローズの房があり、鎖のついた金メッキの

メモ帳を手になっています。

次のドレスはダークグリーンシルクのガウンに斜めに狭いペチュニア色（暗紫褐色）のサテンの線があり、淡いピンクローズと青い忘れな草のデザインの織り模様です。このドレスは「最も現代風であるが、それほどふさわしくはない」と評されています。

セシリーはクリーム色のシルクモスリンで、サテンのストライプがある生地で作られているドレスを着ています。打合せは深く交差し、パフのある袖、クリーム色の厚手のシルクのサッシュベルトと白い経木の大きなガーデンハットを被り、ピンクのバラを付けています。これは郊外での気楽なドレスという表現ですが、「舞台芸術におけるひとつの勝利」とであると評価されています。

3. 舞台衣裳と流行

19世紀後半には、パリの影響から脱してロンドンの新しいドレスメーカーが次第に舞台衣裳に取り組むようになりました。ドレスメーカーにとっては2月から3月頃に上演される劇の衣裳は暇な時期の製作であり、そのために年間を通した衣裳製作が可能であること、また、舞台衣裳は販売促進のために大きな宣伝効果が得られるものであることが重要なのです。観客は劇場で上演されるモダンな生活の劇の中で新しいドレスのデザインを確かめ、それをワードローブに取り入れようとしていました。

さらにロンドンの女性誌は演劇の記事とともに、衣裳についてのイラストや写真、詳しいドレスの説明を載せるようになりました。ロンドンのドレスメーカーがその地位を確立していった過程に、舞台衣裳との関係が大きかったといえるでしょう。

ワイルドの喜劇と衣裳の関係については、「それぞれの場面に合う衣裳」が劇の内容にもふさわしく選ばれたのです。新しく考案したデザインのドレスが劇で用いられ、雑誌に紹介されることによって一般の人々にも知られることとなりました。一歩進んだ感覚のドレスを舞台で用いることによって、そのドレスが流行するという結果を生み出したのです。

ワイルドが風習喜劇における衣裳の重要性を認めていることは、自ら衣裳についての指示をしていたことから明らかです。

グエンドレン役の女優は、その回想のなかで、次のように述べています。

「ワイルドの劇は、確かにある限定された「時代」を表しています。そして、ワイルドが行なったように、家具、装飾、色彩、花のアレンジ、女性のドレスなどにみられる革新的な趣味を、かつて誰が持っていたのでしょうか。」

舞台衣裳は、当時の世相からかけ離れたものでは興味を持たれません。しかし、あまりにも現実的であっては効果がありません。ワイルドがちりばめた人物を象徴する言葉とデザイナーの衣裳創作とのみごとな協同によって、ワイルドの喜劇の舞台衣裳が流行を生み出したのであるといえるでしょう。

謝辞

本研究は、実践女子大学ワイルドコレクションを閲覧させていただいたことから始まりました。実践女子大学、同大学図書館、澤井勇教授に厚く御礼申し上げます。

図版出版

The Queen, March 5 1892, May 13 1893, Jan. 12 1895

The Lady, March 10 1892

Illustrated London News, April 29 1893

The Sketch Feb. 13 1895, March 20 1895

『ウィンダムア卿夫人の扇』



上 アーリン夫人
下 ウィンダムア卿夫人

『なんでもない女』



左 ヘスター 左中 ジェラルド
右中 アーバスノット夫人
右 イリングワース卿

『理想の夫』



ゴーリング卿



ゴーリング卿と
メイベル



チェヴリー夫人



左 チルターン卿夫人
右 チェヴリー夫人

『まじめが肝心』



左 ジャック
右 アルジャン



ジャック



グエンドレン



ブラックネル夫人



セシリー